

*「ボレーシェ」とは チェルノブイリ付近の湖沼低地帯をいう



執念のバイオガス発生! 希望の灯がともる!!

宮腰吉郎



〈液面にわき立つ泡〉

「ん? もしかして、これガス?」 ラスキ滞在二週間を過ぎたときのこと、いつものように薪ストーブの世話のため、薪を運んでいたところ、圧力計に「ガス発生」を示す高低差が出ているのに気づいた。その前日に、いくつかの兆候が出ていたので、「これはガス発生に違いない」と、現場管理者のリョーニャさんとともに確認してみると、「実は昨日、ここで若い衆と酒盛りをしていたときに、オレが息を吹き込んで、この圧力計が機能しているか確認してみたんだ。その影響だろう」とのこと。こうしたことは日常茶飯事なので、いちいち喜んだり悲しんだりしては身が持たない。しかし、なにをやっても、高低差がそのままの状態を保持しているので、試しにマッチで火をつ

けてみると、赤々と燃え始めたのだった。9月に入って、現地はどんどん寒くなり、今年のガス発生も危ぶまれていたが、やっとバイオガス装置が始動していることを確認できた瞬間だった。

「今回の滞在ミッションをひとまずは果たせた」という気の緩みが出たのか、翌日、寝込んでしまったが、途中のガス管（分岐部分）で直接マッチを近づけると火はつくものの、ガス圧が足りないためか、ガスコンロでは火がつかない。とても休む気持ちにはなれず、試行錯誤を続ける。日本側とのやりとりを経て、ガスパッキンの交換をしてみると、ガス圧が急上昇しはじめた。どうやら、ガスが漏れていたらしい。そして、ガス発生10日後、ついにガスコンロに火がついたのだった。

(P8～9へ続く)



〈バイオガスでお湯を沸かす〉

〒466-0064 名古屋市昭和区鶴舞3-8-10 愛知労働文化センター 地下1階

NPO 法人 チェルノブイリ救援・中部

銀行 名：三菱東京UFJ銀行 名古屋営業部（店番号 150）

口座番号：普通 6949211

口座名義：特定非営利活動法人チェルノブイリ救援中部 理事長 小牧 崇

郵便振替：00880-7-108610

TEL / Fax：052-732-7172（月・水・金 10:00～17:00）

ホームページ：<http://www.chernobyl-chubu-jp.org>

今回のウクライナ訪問は私一人だったので、BG 装置の現場の視察や話し合い等で、質問しメモを取るのも一人、写真撮影も一人で、頭や手が回らず大変でした。



〈障害者基金事務所で〉

●被災者 3 団体と「民間健康保険組合」について

先に行なった 3 団体へのアンケート調査や聞き取り調査の結果をまとめているうち、「民間健康保険組合」の利用が低調な理由と、資料情報とが合わず、その原因は何かを聞くことが、前半の大きな仕事でした。3 団体の事務所を訪ね、代表者の方々とじっくりお話ししていると、「保険組合」の実態がはっきりしてきました。

これまでもある程度聞いていたことですが、「保険組合は被災者の重病には対応しない」こと、「一級障害者は加

入できなくなった」こと、「年一回の入院しか保障されない」こと、「高額な医薬品は提供されない」ことなどが、改めてわかりました。

まだ創設 10 年の「保険組合」の財政状況は悪く、加入金の元も取れないのが実態であり、加入の意味がないことなどが切々と訴えられました。日本の医療保障も危うい状況ですが、チェルノブイリ被災者は多くの深刻な病気を抱えながら、国家の補償も当てにならず、厳しい状況に置かれています。

●ナロジチ地区 BG 装置現場・地区病院・村議会・住民訪問

現地を始め、いろいろな人の努力と苦戦が続けられてきたバイオガス現場でしたが、やっと無事コンロの青いガスの炎を見ることができました。現場や日本の皆さんも、ご苦労様でした。

ナロジチ地区病院の院長や保健所長はお忙しく不在でしたが、農業技師の方に「菜の花プロジェクト」について意見をお聞きし、セレツ村の女性村議会議長には、村の現状・人びとの暮らしについてお尋ねしました。「菜の花プロジェクト」の結果が発表されれば、新しい動きが期待できるかも…と感じました。

またその一方で、折しも現地は今キノコの季節で、人々は放射能値の高いことは知りつつも、「目の前の森に生えているキノコを採らないで通り過ぎることは困難」だという、私たちには受け容れ難い現実の生活がありました。



〈放射能を含むキノコか〉



〈セレツ村で水汲みの人〉

●来年度の活動方針、「菜の花プロジェクト」の今後

来年の 4 月 26 日は、チェルノブイリ原発事故から 25 周年を迎えます。ジトーミルやナロジチでも、祈年集会などが催される予定です。カウンターパート「チェルノブイリの人質基金」と、日本からのスタディ・ツアーの企画について、今後詳しく相談します。「菜の花プロジェクト」の栽培計画や今後について、主に現地の意見を聞きました。日本でも協議していきます。皆様も、ご意見をお聞かせください。

「ポレーシェ購読者 ご紹介キャンペーン」にご協力を!!

① ポレーシェ購読者をご紹介ください。

今年度より「賛助会員」(年間 3,000 円以上の寄付金をいただいた方)の導入により、「ポレーシェ」購読者が減少しています。新たな賛同者を募るべく、4 月以降いろいろな集会やフリーマーケット等に参加し、呼びかけを行ってきました。10 月 18・19 日には「COP10」会場でのパネル展示、23・24 日は「もちの木広場(名古屋市中区栄)」での「ワールド・コラボ・フェスタ」に参加し、展示とクリスマスカード・キャンペーンへの協力を訴え、活動の輪を広げていきます。もっともっと多くの方に「ポレーシェ」を読んでいただき、私たちの活動を広範なものにしたいと願って、今回皆様に「ポレーシェ購読者のご紹介」を、お願いする事といたしました。同封の「ポレーシェ購読者紹介カード」に紹介者をご記入の上、FAX か郵送で事務局までご返送ください。ささやかですが、牧歌的な「ナロジチの絵葉書(4 枚組)」をお送りさせていただきます。ひとりでも多くの方々に「ポレーシェ」を購読いただけるよう、ご協力をお願いいたします。



② 「菜の花プロジェクト・一坪キャンペーン」のご報告

3 月末までに 59 名(109 口)の賛同をいただき、6 月末、菜の花畑の大地に皆様方の名前を記した看板を立てさせていただきました(詳細は 118 号をご覧ください)。新年度に入っても、ご加入は続いており、8 月末現在で 71 名(138 口)です。このキャンペーンは、今年度末(2011 年 3 月)まで行っています。現地の要望にきめ細かく対応するため、融通のきく資金カンパとして、より一層のご協力をお願いいたします。

③ 5-8 月 寄付金のご報告

5 月は 97,500 円(19 件)、6 月は 435,300 円(54 件)、7 月は 178,600 円(36 件)、8 月は 707,000 円(45 件)でした。皆様のご支援に心から感謝いたします。(神谷)

Nたま研修生 自己紹介



皆さま、はじめまして。『高木雅成(タカギマサナリ)』と申します。9 月より研修生として、チェルノブイリ救援・中部ならびに、みなさんの一員になりました。お世話になります。

現在は、発足当時から続いております「クリスマスカード・キャンペーン」を担当させていただいています。皆さまには、毎年素敵なクリスマスカードを描いていただき、ありがとうございます。現

地の子ども達には大変喜ばれたということで、今年も心待ちにしていることと思いますので、どうぞご協力をお願いします。さて、簡単ではありますが、自己紹介をさせていただきます。

僕は、名古屋 NGO センターが主催した『NGO スタッフになりたい人のためのコミュニティ・カレッジ(通称 Nたま)』の 8 期生として、NGO についての勉強中です。その勉強の一環として、チェルノブイリ救援・中部で、3 月まで研修をさせていただきます。「人のために何かをしたい。」誰もが持つであろうこの思いを、どう実現すればいいのか? 自分のやるべきこと、できることはなんだろう? 学び初めてからは、自問自答の毎日です。そして、自分の小ささにとても驚いています。微力ながらも、一步一步前進していけたら幸いです。

僕の趣味の一つに、『カメラと写真』があります。下手の横好きですが、外出するたびに持ち歩いています。写真は動きません。しかし、それを見た人の心は、動くのではないかと思います。お子さんの運動会や旅行の写真を見て、思い出が蘇ったりしたことはありませんか? 写真っていいですよね。最後になりますが、半年という長いようで短い期間ですが、よろしくお願いいたします。

チェル救合宿 in 伊那

7月31日～8月1日の1泊2日で、ひぐらしが鳴き涼風が吹きぬける極上の避暑地「伊那」で、熱く語り合う合宿を行いました。毎月の運営委員会では、議題も多く、なかなか一つ一つの問題を深く掘り下げることが難しいのが現状です。そこで、合宿ではテーマを絞り、一つのテーマを2時間くらいかけて、ブレインストーミング方式で考えを出し合い、少しずつまとめていきます。そこでまとまった方針を軸に、さらに運営委員会でも話し合い、決定していくのです。

今回のテーマはもちろん「菜の花プロジェクト」。5カ年計画のプロジェクトも終盤を迎え、「5年後以降」を見据えなくてはなりません。直近の問題では、ナロジチが冬を迎える前にバイオガスのガスを出せるかどうか、大きな懸案事項です（この時点で、またガスは発生していませんでした）。また寄付金の減少をどう食い止めるか、どのようなアプローチなら増やしていけるのか、などアイデアを出し合いました。

いつもと異なる空間に身を置き、リラックスした雰囲気での話し合いは、運営委員会とは違う趣きです。そして、毎日35度以上の暑さにさらされた身体には、伊那の空気は素晴らしいご馳走となりました。（市原佳代）

COP10

（生物多様性交流フェア）に参加します



COP10（生物多様性条約第10回締約国会議）に伴って開催される“生物多様性交流フェア”に参加して、ブース展示を行うことになりました。このブース展示は、名古屋 NGO センターのブース内に、名古屋地区の NGO/NPO が担当日を決めて展示を行うものです。

チェル救のブース展示の日時と場所は、以下の通りです。

日時：10月18日（月）、19日（火）9:30～18:30

場所：名古屋国際会議場隣接の白鳥地区

※会場へのアクセスは、地下鉄名城線「西高蔵」駅 ②番出口より 徒歩5分
もしくは、地下鉄名港線「日比野」駅 ①番出口より 徒歩5分となります。

なお、“生物多様性交流フェア”は、生物多様性をテーマとした国際的な発表・交流展示会です。

国内外の政府や自治体・国際機関・NGO/NPO・学術・企業など、200以上の団体が出展する予定で、10月11日（月）から29日（金）まで開催されます。フェアについて詳しく知りたい方は、“生物多様性交流フェア” ホームページ <http://www.cop10.jp/fair/index.html> にアクセスしてみてください。

さて肝心の展示内容ですが、“生物多様性と放射能汚染”という視点から「菜の花プロジェクト」を中心にまとめる予定です。

生物多様性という視点からチェルノブイリを捉え直してみるのも、今後の活動を考える上で面白いのかなと感じています。多様な見方が大切です。

皆さんからも、「生物多様性とチェルノブイリやチェル救の活動には、こんなつながりもあるので？」というご意見がいただけるとありがたいです。また、ご都合のつく方は、ぜひ会場に足を運んでください。（池田光司）

「生物が多様であるがゆえ、放射能汚染が計り知れなく恐ろしいものとなる一方、放射能汚染からの再生の希望も生まれる。」という『声』を発信できたらと思っています。

「ワールド・コラボ・フェスタ 2010」に、今年も出展します。

今年も、名古屋市栄の久屋大通り公園「もちの木広場」ならびに「オアシス 21」で、『ワールド・コラボ・フェスタ』が 10 月 23 日(土)・24 日(日)の 2 日間開催されます。同フェスタは、中部地方の NGO などが一堂に会す、国際交流・国際協力・多文化共生・環境などをテーマとしたイベントです。各々のブース出展やフェアトレードのコーナー、ワールドカフェやコラボ・ワクワク体験村など、発見や体験を通して国際理解を深められる国際交流イベントです。ホームページアドレスはこちら。<http://www.world-collabo.jp/>



＜昨年（2009. 10. 24）のブースの様子＞

私たちは、団体発足当時から続けている、「クリスマスカード・キャンペーン」とパネル展示を展開します。チェルノブイリ原発事故から 24 年。刻々と時は流れるものの、現地では今なお、放射能による被曝の影響で、ガン・甲状腺異常・白血病などに苦しむ方々が後を絶ちません。これは、事故当時の大人や子ども達だけではなく、2010 年を生きる子ども達にも言えることなのです。「クリスマスカード・キャンペーン」は、病院や孤児院に住むチェルノブイリの子供達にクリスマスカードを贈り、彼らを励ますとともに「原発事故について忘れていません」という思いを届ける、心の交流を目的としたキャンペーンです。昨年は、2008 通のクリスマスカードを現地へ届けることができました。毎年、多くの方々にブースへ足を運んでいただき、クリスマスカードにたくさんの温かい想いを描いていただいています。そして、その想いをチェルノブイリの子供達に届けることができます。今年は、名古屋市で開催される、生物多様性を考える国際会議「COP10」の開催も重なっており、昨年よりも多くの方々が、ブースに足を運んでいただけることと思います。そのため、より一層、多くの温かい想いを届けることができるのではないかと思います。また、一人でも多くの方に、チェルノブイリ原発事故についての見識を深めていただき、「忘れていません」という想いを持ち続けていただけるように、事務局一同一丸となり、頑張っていく所存です。

みなさまのご来場、キャンペーンへのご参加を心よりお待ちしております。

（高木）

「NGO を広めるプロジェクト(地下鉄 NGO)～全国初の NGO 列車～」

今年 6 月から、名古屋 NGO センターと JICA 中部主催の『NGO を広めるプロジェクト』の研修に参加してきました。このプロジェクトに、中部地区の 14 団体の NGO が参加し、それぞれの“こんな広告にしたい”“こんなことを伝えたい・アピールしたい”などの想いを、話し合って形にしました。研修会には、広告のスペシャリストの人にも来ていただいて、広告の背景や文字の色・大きさ・種類、目につくような文面や写真など、見てもらいたい人のターゲットを絞り、皆さんの心に届くようなキャッチフレーズを考えて、広告作りをしました。直接的な「チェルノブイリ救援・中部」の宣伝ではないのですが、同じような想いをもった団体と考えた、素敵な広告ができました。

約半年に及ぶ研修を重ねてできた広告が、10 月と 11 月の 2 ヶ月間、地下鉄鶴舞線（名鉄接続を除く）に乗車すると、NGO の広告が 1 車両につき 1 つあります（扉付近の小枠）。全 6 車両で 6 種類の広告です。この地下鉄広告が、NGO の活動を知るきっかけとなり、世界の課題を身近に感じていただけるきっかけになれば幸いです。

このプロジェクトの参加 NGO にアクセスできるホームページアドレスです。 <http://nangoc.org/chikatetsu/top/>

地下鉄 鶴舞線に乗車した際は、是非みつめて見てくださいね。



👉 このマークが目印です。

（山本）

ウクライナ バイオガス&BDF「糞」闘記 【後編】

(原 富男)

* 認識の違い…、「赤ちゃん」に「固い肉やパン」を食べさせてしまった！

現地入りして間もない頃、原料投入の場面を見ました。貨車の中から見てみると、作業者はバケツに入った牛糞を直接「投入口」に入れ、長い棒で押し込んでいました。水は近くの水溜りの「雨水」を少し汲んで「ちょこっと」入れるという光景でした。直ぐに「これはいけない！」と思いました。翌日作業員に手順を見せました。先ず、バケツの上にザル状の桶を置き、牛糞をザルに入れ水を加えます。これをゆっくりかき混ぜると、水分を含んだ牛糞は下のバケツに落ちるので、残った牛糞の中から「長い敷き藁」や入れてはならない物を取り除き、投入するのです。水も、水溜りの雨水では泥や砂が槽の中に溜まるので、井戸水を使うよう説明しました。これまでバイオガスは、装置を作ること追われ、装置を運転することに重きを置けなかったと思います。私自身、装置を作り終えると直ぐ帰国し、多忙な日本での日常に入らざるを得なかった経過があります。また現地側からすれば、農場の代表者とガスの監督責任者にしか事情を知らされず、作業員は単に「1日40キロの「生牛糞」と等量の「水」を入れればいい」と考えていたのではないかと思います。そのうちに、水の量も「い



い加減」になり、井戸水ではなく傍にある雨溜まりの水を使う、という具合になったのだと思います。それでも、ガスが発生し「点火」できたために、「おかしい」ということに気がつかず、「粗い原料」を入れ続けてしまったのです。今から思えば、装置の引渡しの際に「充分な説明をしておけば良かった」と反省しています。今回私は現地側に、この装置は「離乳期の赤ちゃん」と同じだから、当面「固い肉やパン」（長い藁や固形物）をそのまま食べさせないように、と再三説明しました。

発酵槽の中から「固まった牛糞や藁」をすくい上げている途中、中程で感動的な場面がありました。上層のスカムと言われる「堆積物」を取り除いたとき、「ぶくぶく」と泡立つ場所に出くわしました。硬くなった上層に阻まれたガスが、生き生きと出てきたのです。この場面を見て、この装置は「必ず生き返る」と確信しました。適切な原料投入と管理ができれば、充分ガスを発生させることができるのです。それを見て、自分自身この装置に愛情の無かったことを反省しました。

堆積物の排出作業は、帰国日が迫ったため、私たち自身の手で終わらせることができませんでした。残りの作業約3割は農場側に依頼し、7月25日をめどに終わらせることとなりました。

* バイオディーゼル燃料を造る

バイオガス装置のあるラスキ村から車で15分程離れたナロジチ町に、バイオディーゼル燃料（以下BDFと略す）製造装置のある「非常事態省土地管理ステーション」があります。一昨年この場所で、BDF装置メーカーMSD・武田社長のご指導のもと、私たちはBDFを作ることに成功しました。その後バイオガス工事があり、BDFを引き続き製造することができずにいました。一昨年は、購入した菜種油でBDFを造りましたが、今年は一歩進んで私たちの畑で栽培した「菜種」を使い、BDFを造ることになりました。事前に、ステーションのアナトリーさんをはじめとする職員の方々に、ウクライナ製の搾油機で菜種を絞っていただきました。ステーションには、2回BDFを造れる量の「菜種油」が準備されていました。私と竹内さんは、前夜から作業の段取りをシミュレーションし、スムーズに造れるよう話し合いました。今回の油は、機械的な精製を行わず、自然に沈殿させた上油のみ

を使うことにしました。

*BDF 製造でのアクシデント

第一工程は、菜種油を機械に投入し、順調に温度は上がりました。ところが、第二工程のエステル交換反応でアクシデントが発生しました。メタノールと水酸化ナトリウムを混合した溶液を原油に加え、64℃まで温度を上げて攪拌すれば、静止後 15 分程で BDF とグリセリンに分離されるはずなのに、「分離されない」という事態になったのです。この原因は、私が期限切れの水酸化ナトリウムを「もったいない」と思って使ってしまったことにあります。その時は原因が分からず、この日は作業を中断、翌日現場に行ってみると、分離されていない油を入れておいたバケツの中には、グリセリンができていました。そこでもう一度、昨日の温度まで上げた後温度を下げてみると、不十分ながらもグリセリンと BDF に分離することができました。この後、BDF をお湯で洗う第三工程に入りましたが、装置の電源である発電機が、40℃の温度でオーバーヒートしてしまいました。結局、発電機が直るまで製造は中断となり、後日、竹内さんとディードゥフ氏、アナトリー氏の三人で造ることにになりました。

今回の訪問では、バイオガスも BDF も宣伝できるような「成果」を上げることができませんでした。しかし、私も竹内さんも悲観しているわけではありません。昨年までの作業は、設備を作ること。今年からは、それを使いこなし地域に展開することですから、「バイオガスの原料投入ミスや BDF のミス」も、失敗の経験に学ぶということからすれば、この時期で良かったのだ！と思います。バイオガスも BDF も、これで使える道筋がついたのです。

*粗く雑な仕事を防ぐために

これから「菜の花プロジェクト」を継続するにあたり、大事なことは、現地と日本人の「温度差」をどうするかだと思います。資金や組織の力量が不十分なため、私達はこれまで「急ぎすぎた」ように思えます。急ぎすぎたために、一つ一つの手続きを正確に伝えることができず、点検確認ができなかったように思います。このくらいのことは「解っているはず」と思っていたところ、全く「解っていなかった」という事がたくさんありました。現地には、こちらの伝えたいことの 1/3 程度しか伝わっていないと考えるべきです。その上、現地の人々の作業は極めて粗く雑なものです。これを一概に批判することはできませんが、日本人としては非常に苛立ちます。生活でのゆとりという面でも考えさせられます。現地の日曜日には、川向こうでサッカーの試合があり、近くの池で釣りをして、住民は「楽しんでいる」のに、日本から派遣された私たちは「休日返上」で働くという姿と、「金はない」けど「なんとか食える」ゆったりした生活、つまり「急ぐ必要のない生活」を送っている現地の人たちと私たちのスタイルを突き合わせて考えると、今後のあり方が見えてくるように思えます。日本での忙しい生活を割いて、現地での工事に参加してきた私としては、生活上の理由から「もう限界」と考え、今回をもってウクライナ訪問を終わりにしようと思っていました。しかし、「辛くなるような思いで」していることが、うまく進むはずはありません。急ぐと、「専門家」や「物知り」だけが表に出てしまい、いろいろな人が加わる要素がなくなるのではないのでしょうか。今回で下準備は終わりました。これからは、いろいろな人がナロジチやラスキで住民と付き合えばいいとのだと思います。勿論私も釣竿持参で出かけるつもりです。



今後は、「あせらず」「じっくり」、そして「言いたいことがしっかり伝わっているか」を確認しながら付き合っていくことが、実は一番大事なことであったと思います。

(宮腰 吉郎)



あらためまして、「ナロジチ再生・菜の花プロジェクト」を追い続けて5年になる宮腰です。8月末から9月末にかけて1ヶ月ほど、原さんの後を受け、バイオガス装置で安定的にガスが出る状態にするべく依頼を受け、現地派遣されました。

当初、伝え聞く情報から、「私が行く頃には投入も終わっているだろう…」ぐらいの見通しで現地入りし、現地で(本業の)映像編集作業ができるぐらいに思っていたのですが、チェル救の依頼はそんな甘いものではなかったのです。

以下、順に現地での出来事を報告します。

●現場到着

まず、ガスがわずかでも発生していないか、バケツに水を張ってホースで確認するが、まったく気泡は現れず…。バイオガスでの重要な指標であるペーハー(pH)は8、温度は23度で問題はない。現場管理者のリョーニャさんは「原料が足りていない」と見ているようで、その数日前から日本側からの指示で新たな水の投入はやめ、「排出槽からの水を再投入している」とのことだった。

●投入方法

実際に牛糞を投入している現場に立ち会う。10分程度の作業時間で投入を完了。スカムを発生させないように、牛糞内の繊維分を除去する作業があり、これはナイロン手袋をはめて手作業で行っていることを知る。ただし、日本側が指示した方法とは微妙に異なっていた。

●加温

このバイオガス装置は「常温発酵型」であるが、高緯度寒冷地方での試行であり、加温装置が予め組み込まれている。ガスが発生したらそのガスで不凍液を温め、発酵槽内に敷かれた100mほどの長さのパイプ内をポンプを使って循環させる…という仕組みだが、ガスが発生しないうちは薪ストーブで温めることになっていて、この「薪ストーブの世話」という仕事も必要になってくる。だいたい十数分でパイプの中を一周しているようなので、「何度かポンプを止めて、温めては放流、というのを繰り返すと効率が良い」ということが分かった。



<加温のための薪ストーブ>

●豚糞

ずっと牛糞を投入してもらっているが、よりガス発生量の多い豚糞の検討を始める。ネックは豚舎が遠いこと。1kmとは言わないが、確実に500m以上はあり、牛糞のように100mちょい離れた牛舎からバケツで運んでくる、というわけにはいかない。

●豚舎

100頭以上の豚を飼っている。村の各家庭にも、子豚を売っている。エサは大麦・小麦が主食で、ジャガイモ



<白馬が運ぶ豚糞>

をまぜた粥や、ビタミン補給の意味で草なども食べさせている。

●グリセリン

BDF の副産物のグリセリンも、BG にとっては良い原料である（量を間違えると大変なことになるが・・・）。pH12 程度のアルカリ性なので、塩酸で中和してから投入することになるのだが、この塩酸の入手に苦労した。

●投入量

「一日に、朝昼 20kg ずつで 40kg 投入」という指示が与えられていて、日誌上もそうなっているが、実際にどれだけ投入されているかは誰にも分からない。実際、何度か投入されなかったことがあるのを確認した。ガスが出ないのは、「単に投入量が足りていない」というだけの可能性が出てきた。



●豚糞へ切り替え

豚糞に切り替えることになったが、豚糞は牛糞よりも固形分が多く、繊維分を除去する際、牛糞と同様のやり方では効率が悪いことが分かった。現場作業員にそれを強要はできないため、自分でするより他なくなり、汗だくになりながら、よりよい方法を模索。ナイロン手袋の先はとっくに破れているため、ほとんど直に糞を触っていたようなものだが、夜中に爪の先がジンジンと疼き、痛みで目が覚めることもあった。この間、薪の世話もすべてしていたため、買い物に行く暇もなかった。ちょうどこの時期は収穫期で、農業企業体の人たちも皆忙しかった。

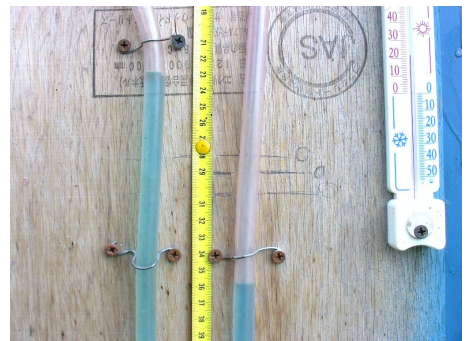


●ガスの兆候

時々、発酵槽の液分を取り出して観察していたが、ある日、ブクブクと小さな泡がいくつか上がっていくのが観察できた。これは「ついにガスが発生し始めた証拠だ」と思い、リョーニャさんが現場に来た時に見せると、同じ手順で採取しても泡は出なかったのだった。「ワシは見たんや」と、言っても、現に目の前の液体では出ていないので、どうしようもない。

●ガスが出る

その翌日、ついにガス発生。豚糞の投入についても、リョーニャさんに相談したところ、ちょうど投入口にはまるぐらいの大きさの網を持ってきてくれて、その網の上に予め水で攪拌した豚糞をぶちまけ、鋤簾（ジョレン）でならしながら絞る、という方法がもっとも楽で効率がよく、この方法であれば、作業員的にも許容範囲のようで行ってくれるようになった。



* * * * *

ここには再現しませんでした。今回滞在中、チェル救のメンバーの皆さんとの間で、激しい意見のやりとりがあったことを付記しておきます。私はこのプロジェクトには非現実的なところがあり、5 年目を迎えるにあたり、今後、貴重なお金をどのように使うかにつき、「戦略を持って、集中して効果のあるところに限定して使うべきだ」という考えから、意見を述べました。また、機会があれば、ポレーシェ誌上で意見交換できればと思っています。

昨年ナロジチ地区に建設したバイオガス装置で、やっとバイオガスの生産が始まった。様々な困難の中で、こつこつと続けた努力が実った。プロジェクトも 4 年目の半ばを過ぎようとしている。あと 1 年半で何処まで行けるか、正念場を迎える。一方、ウクライナ国内では、初めて大型のバイオガス・プラントが稼動を始めた、というニュースが入った。我々の装置は極めて小型ではあるがこの国の将来に問題提起できることを願う

●ナロジチで始まったバイオガス生産

今号の宮腰報告にあるように、ナロジチに建造したバイオガス装置でやっとバイオガス (BG) の継続的発生が可能となった。ここまでこぎつけるために様々な困難と闘った、原・竹内・宮腰・遠藤の各氏に敬意を惜しまない。原理的に可能でも、実際にそれを実現するには、日本とウクライナの習慣の違いなど、様々な要因が関与することが、この事業で初めて分かった。牛糞一つとっても、餌が違えば成分も違うのである。最終的な目標まではまだまだである。ナタネの油粕を使って BG の発生量を確かめ、廃液中の放射能を調べ、処理装置を作らなければならない。あと 1 年半である。しかし、バイオディーゼル油 (BDF) 製造も可能になり、個々の装置が現地の方で動くようになったことは、大きな前進である。今後は、このプロジェクトが目指す「菜の花栽培と BDF 生産」「バイオガス生産」の循環を確立し、放射性廃棄物処理に至るサイクルを完成させる、という目標に向けて努力しよう。

●ウクライナで大型バイオガス装置運転

最近明らかになった事だが、ウクライナの首都キエフ近郊の農場で、かなり大型のバイオガス装置の運転が始まった。子ども用のミルクを生産する企業が、自社の牛 4,000 頭の牛糞を処理し、同時にバイオガスを生産するために作った、という。バイオガスは「コジェネレーション」で発電と同時に熱を回収する。発電電力は 625Kw、回収される熱 686Kw 相当で、年間 120 万立方メートルの天然ガス相当という大型の設備である。自家用で余った電力は配電網を通じて売電している。昨年稼動を開始し、20 年来の厳寒の冬もガスが出続けた、と紹介されている。この装置を作ったのは、スイスに本社があるドイツ系の ZORG 社で、かなり前からウクライナのエネルギー問題に注目し、いずれはウクライナでバイオガス生産が本格的

になる、と見込んでいたようだ。これはウクライナにおける本格的なバイオガス時代の幕開けである。

●ウクライナは再生可能エネルギー資源大国

かつてウクライナは石炭王国だった。しかし、ソ連時代に配分し尽くし、今は面影もない。石油も天然ガスももっぱらロシア頼みで、弱みを握られているために、EU 加盟派とロシア派の紛争の種にもなっている。ウクライナにとって、エネルギー独立は将来の大きな課題である。そのために、バイオエネルギーの必要性は常に語られるものの、国の財政的支援がないために、実現できなかった。この度のミルク工場の BG 生産には、政治レベルでの変化があった。「緑の税制」という制度が昨年からは始まり、バイオエネルギーによる電気を国が買い上げる「優遇制度」が始まったのである。今回のミルク工場の BG 発電は、その適用第一号である。この制度は、最低 10 年間は続くという。ウクライナは、農業とともに畜産王国でもある。牛や豚の糞の処理をかねて BG を作れば、かなりのレベルの自給ができる。同時に、炭酸ガス低減にもつながり、国際的にも歓迎される。また、ウクライナのナタネ生産能力は、約 300 万ヘクタール (現在の日本は 800 ヘクタール) と言われ、すでにドイツなどがバイオディーゼルのためのナタネ栽培に参入している。現在は、もっぱら海外に種子を売るだけだが、BDF の国内生産もいずれは始まる。

●未来に目を向け、着実に歩もう

我々のプロジェクトは、極めて小型ですぐに大きな影響力を発揮することはない。しかし、BDF と BG を連動させ、循環型のエネルギーシステムを作ることは、ウクライナにとって、将来のモデルとなるはずである。

ゆっくりと、しかし着実に歩もう。 (河田)

竹内さんのウクライナ便り

ウクライナでも記録的に暑かった長い夏が過ぎ去って、秋らしい日和になってきました。「救援・中部」の仕事で、9月中旬ジトーミル市に行くと、政党・政治家のポスターが街中のいたるところに目立ち、そういえば、と10月31日に予定されている統一地方選挙のことを思い出しましたが、宿泊したホテルの部屋の窓が面している広場では、某氏の上半身がすっと写った巨大なポスターが夜間にもライト・アップされており、なんだか不気味な感じでした。キエフに戻ってくると、道路沿いにやはり各政党の宣伝ポスターが大きく掲げられているのですが、現在の与党である地域党のものは、「新しい国を築こう！」あるいは「安定を通じて繁栄へ」というキャッチ・フレーズがついており、デザイン的にもなんだかソ連時代を思い出させられるような気がするのは、私のひが目でしょうか。しばらく前には、地域党のリーダー、大統領ヤヌコーヴィチ氏の、明らかに美しく修正された写真があらわれたポスターが目についたのですが、さすがに最近はより修正が少ない(?)ものに替わりました。世論調査によれば、この地方選に候補者を出す政党の中で、特に有権者の支持を得ているのは、地域党、ユーリヤ・ティモシェンコ・ブロック、「強いウクライナ」(ティギブコ副首相が主導)、「変化の戦線」(ヤツェニウク元最高会議議長が主導)などの政治勢力。ヤヌコーヴィチ氏と、彼の指名したアザロフ首相の半年間の施政は、某週刊誌では5段階評価の4と格付けされていますが、その判断の主な根拠となっているのは、前大統領時代と異なって大統領と内閣・最高会議のあつれきがぐっと減少、ロシアと欧米の両者に配慮した外交が功を奏し、国際通貨基金からの新たな融資も得られ、新税法案も議会との妥協を経て改訂されなんとか成立にこぎつけられそう・・・といった一応の成果です。しかし、これらの政策には、前政権下で地域党が野党であった際に得た教訓が、大いにプラスに働いているのではないかとこの気もしますが。

一方、奇矯な言動で過去に種々物議を醸して



<滞在中に新事務所で打ち合わせ(2010.09)>

いたキエフ市長チェルノヴェツキー氏は、新政権の圧力で病気休暇に追い込まれ、市政の実権は副市長のボボフ氏が握り、チェルノヴェツキー氏の下での市当局関係者の収賄にからんで数十件の訴訟が起こされた由。それと同時に、これまで滞っていたキエフ市内の道路工事(近年の交通量増加に伴い、市内各所で大規模な渋滞が日常化しており、それを解消するためのバイパス建設などが計画されていた)や地下鉄線延長工事などが一気に加速されたとの報道もあり、たしかに、用事で市内を移動すると、道路拡張工事やバイパス工事などがあちこちで目につきます。しかし、これまで10あった市内の地区を合併させ7つにするとか、地区議会を廃止して地区行政庁だけにするとかいううわさも流れており、権威主義的なやり方で「効率」を上げるという状況になりつつあるのではないかと懸念してしまいます。いずれにせよ、今年の大統領選で「誰にも投票しない」という選択肢を選んだ作家ザブジコ氏も、最近のネット上での読者とのチャットでは、「まさにこの地方選挙が、現在、市民の闘いの出発点なのです。[中略]このローカルなレベルで、ウクライナ社会は今日、権力に対し注文をつけていくという自らの能力を明らかにできるのです」と発言しており、政権党としての力をフルに活用して、地方に至るまで一枚岩の支配を布こうとする地域党と、「市民社会」勢力がどのようにせめぎあっていくのか、後者の力がウクライナでまだまだ弱いのは事実ですが、またご報告していきたいと思います。(9月30日)

事務局便り

部屋の中で仕事して、腕が日焼けする?! 冷房無し夏の事務所で仕事は、なかなかヘビーだったが、ラスキで奮闘＝糞闘した宮腰さんを思えば、語るに値しない。が、まあ、それぞれの持ち場でいろいろなことはあるものだ。一さて、10月と言えば、COP10・MOP5で河田さんが奔走・活躍し、カードキャンペーンの開始に伴い、ワールドコラボでは、研修生の高木さんがキャンペーンボーイとしてデビューする。そして上期決算、2つの助成金報告書作成・提出一と、事務局ではかなりの忙しさが待ち受けている。締め切り間際の真夜中の仕事はしたくない。

早め早めに…と、いつも思うことだが、さてどうなることやら。
(山盛)

お宝ネット 発送先および連絡先

〒399-4511

上伊那郡南箕輪村南原 9955-2 原方
「救援・中部 お宝ネット」宛

TEL 0265-73-9355

Fax 0265-73-9352

2011年の「サンタクロースツアー」は、断念します。

残念ながら8月末までのツアー申し込みが、最低催行人員に到達しませんでした。

その結果、2011年1月のサンタクロースツアーは、実施しないことになりました。

お問合せいただいた方には、たいへん申し訳ありません。

2012年1月の参加者募集は、2011年6月号から始めますので、しばらくおまちください。

クリスマスカードキャンペーンは、今年も行います。どうぞご協力をお願いします。(美)

クリスマスカードの受け付けは、12月14日(火)必着。

送付先：〒466-0064 名古屋市昭和区鶴舞3-8-10 愛知労働文化センター 地下1階

* 詳細は、同封のチラシをご参照ください。

編集後記

☆半年ぶりに美容院に行こうと思って電話をしたら、「今日は担当が休みなので…」とやんわり断られる。担当って誰よ!? たまたま前回関わった人が担当?? え〜! 「今日行っとこ」と思った私の予定は

どうなるの? 美容院のシステム優先かい!! (怒) 私としては、他の人でも構わないんだけど…。(美)

☆10 数年ぶりに結婚式に出席することに。ご祝儀の相場がさっぱりわからずネットで調べると、デフレのご時勢なのにご祝儀は上昇傾向。財務省は何しとるん!? (佳)

☆9月の現地訪問。他に行ける人がいない、問題がいろいろあるなか、いつもより力を抜いて出かけ、こちらはほとんど何も言わず、あちらの意見に耳を傾ける。こちらの姿勢、あちらの対応。思うに、これまでは肩に力が入りすぎていたかな。(戸)

☆「凜の会」の郵政不正疑惑の捜査にあたった、大阪地検特捜部の主任検事前田容疑者(押収したフロッピーディスクの日付改ざん容疑)、その直属上司であった前部長・前副部長が次々に逮捕されるという、前代未聞の事件が発生した。この事件は、一主任検事レベルの問題ではなく、「検察」という組織全体の犯罪として、今後とも追及されていくだろう。このことは、小沢一郎さん、鈴木宗男さん、三井環さん、植草一秀さん達の事件もまた、冤罪である可能性を示唆している。本当に正しいことを言っている人間は誰なのか? それを知った時、あなたは今までの人生観を180°変えることになるでしょう。(J)

〒456-0022 名古屋市熱田区波寄町 20-14

印刷「エープリント」

TEL・FAX (052) 871-9473